

池田小百合『歌って暮らせば』(2012年, 夢工房)

第1章 娘が小さかった頃

叱る

娘たちが小学生の春休み、家族で「焼津グランドホテル」に泊まった。ベッドに寝たままで海から太陽が昇るのを見る事ができるホテルです。

ホテルの大浴場に娘たちを連れて行くと、先に小さい子を連れてきたお母さんと、おばあさんが入っていたが、私たちが裸になり「ワイ！」と勢いよく入って行くと、そそくさと出て行った。大浴場は三人だけの貸し切りとなった。シャワーが珍しかったので、沢山あるシャワーを全開にしてシャワーのトンネルを作り、はしゃぎ回った。浴槽もプールのように広がった。泳いだり、長く潜ってられるかを競ったり、歓声を上げて、楽しく騒いだ。それで三人とも満足した。

お風呂から出ると、外の出口でお父さんが待っていた。お父さんは一言「みんなの楽しい声が聞こえましたよ」と言った。娘たちはお父さんに向かって、「楽しかったの」「おもしろかったの」、こんなだった、あんなだったと、ひとしきり風呂場の楽しい様子を語った。

しかし、私は愕然とした。お父さんは隣の男風呂にまで私たちの歓声が響き渡って「恥ずかしかった」、みなさんに「迷惑をかけた」と、それとなく叱っているのだった。私は子供と同じレベルで騒ぎまくった事を深く反省した。「親としての自覚」が足りなかった。最初に入っていた子供づれの一家にも謝りたい。怒鳴りつけられたわけではなかったのに、今でも思い出します。その一言は心に残り、以後、子育ての道しるべになっています。このように怒鳴りつけなくても効果のある叱り方があるもので

す。

世界一

近所にケーキ屋ができた。ショートケーキの中に、シュークリームが入っていて、一度で二度美味しいケーキ「スノーマウンテン」が一番人気です。ある時、そのケーキをおやつに買って来て小学生の娘と三人で食べていました。そこに、夫が帰宅しました。

「お父さん、おかえりなさい。お父さんもケーキ食べて」「世界一おいしいケーキだよ」「このケーキは世界一」。私たちは、その美味しさをお父さんに一生懸命伝えた。ところが、お父さん「世界中のケーキを食べたわけではないでしょう。このケーキが世界一美味しいとはかぎらないのではないか」と言った。その場にいた全員が反省した。そうだ、世界中のケーキを食べて、比べたわけではなかった。私たちは、その後、もくもくとケーキを食べ続けて終わった。「世界一美味しい」はずのケーキが、いっきよに「普通のケーキ」になった。そして、「世界一」という言葉は安易に使えないのだと悟った。「世界一美味しい」とは、今でいうと「超美味しい」と同じ意味です。今年のクリスマスに、夫が「スノーマウンテン」を買って来た。夫婦で「このケーキを食べるのは久しぶり、世界一美味しい」と言いながら食べた。

ナポレオン

二階に上がって行くと娘たち（十歳と八歳）が話をしているのが聞こえた。階段の上段の踊り場で耳をすますと、それは驚くような話だった。私は部屋に入るのをためらった。

「ぼくたちは、何億個という精子を勝ち抜いて人として誕生して来たんだね」「そうだ

よ。だから賢い」「優秀者だよ」「帝王切開だから、ナポレオンと同じさ」「それって、すごい事だよ。娘たちは、自分たちで作った団子に缶詰の餡子をかけておやつをしていた。しかも、抹茶を立てて飲んでいた。私が部屋に入ると、「お母さんも、どうぞ」「おいしいよ」と言った。

後日、夫にこの話をした。「家には、生物の本が沢山あるから、それを読んだのかしら。すると夫は、「今は、小学校でもセックスについて教えるんだ。人の誕生というテーマで、赤ちゃんの作り方を図やアニメで見せている」と言った。私は驚くばかりだった。次々と入る情報を処理できない。私は、ずいぶん遅れてしまっている。その事が一番ショックだった。ただ、自分の誕生についての知識があれば、人は命を大切にするものです。

「ぼく」は

小さい頃、娘たちは自分の事を「ぼく」と言っていた。それを聞いた近所のおばあさんが、「女の子だから、ぼくじゃなくて、わたしでしょう」と言ったほどだから、女の子が「ぼく」と言うのには違和感があったのだろう。これは、絵本の影響です。絵本の女の子の主人公は、「サッチャン」「ノンちゃん」「ミッチャン」など愛称で言い、「わたし」とは言わない。一方、男の子の主人公は、圧倒的に「ぼく」が多い。「ひろよし」とか「じゅんのすけ」、「じろうざえもん」では、絵本にならない。

娘たちはたくさんの絵本や紙芝居を見ているうちに、自分の事を「ぼく」と言うようになった。それは自然な事でした。小学校に入学すると、やがて言わなくなった。

映画 E T

昭和五十七年(1982年)、『E T』という映画が世界中で大ヒットしていた。日本に

も来たので早速、家族全員で見に行った。小田原には、国道沿いに小田原中央劇場という大きな映画館があった。

E Tは、気のいい宇宙人。病気になったE Tを、大人たちは研究に使おうと必死で探し、捕まえようとするが、子供たちはみんなで大人からE Tを守り宇宙に返す話。この映画のすばらしい所は、子供たちが宇宙人を大人から守るという所です。E Tに「帰りたい場所は」と聞くと、「オウチ」と言う。あたたかい感動が伝わる映画です。スピルバーグ監督の一大傑作。

娘たちは、まだ小さかった(三歳と一歳)。次女はオムツをしていて、映画館の前の席の背もたれにつかまらせ、通路に立たせたままオムツを取り替えたのを憶えています。『E T』の映画の話になると、セットで「オムツ交換」が思い出されます。

私たち夫婦は、この映画のように自分たちが見たいため、映画館に行き、博物館に、美術館にと、あらゆる所に子供たちを連れて遊びに行きました。子供たちに教育をするために行動をするのではなく、自分たちが楽しむのが先で、それに子供たちを同行させていただけです。

最近、また『E T』の映画が夫婦の間で話題になり、「あの時、長女はどうしていたかな。小さかったから何も覚えていないだろうね」と夫が言うので、三十歳を過ぎた娘に「E T」の映画の事を聞いてみた。すると驚くことを言いました。

「あの時一回観ただけだよ。映画館は満員だったね。小さい宇宙人が出て来て、おもちゃと間違えられたりして。あまり内容は覚えていないけど、お母さんが突然妹のオムツを替えたね。通路に立たせて。大勢の人の前で、ビックリだった。」

なんと、長女も『E T』の映画と「オムツ交換」をセットで覚えていた。こんな事、スピルバーグ監督は知る由もないだろう。

トイレトレーニング

「和式トイレ」が使えない子供が増加しているそうです。学校では新入生のために「和式トイレ」を「洋式トイレ」に作り変えている。一、二年生では、学校の和式トイレを使わない子が増えているのだそうです。幼稚園では和式トイレの使い方を先生が教え、家庭では和式トイレの訓練に近所のコンビニに、月に一、二回通う親子も現れた。それは、「どちらの方向に、しゃがむか」から教えるそうで、過保護としか言いようがない。

わが家のトイレは「和式」でした。では、トイレトレーニングをどうしていたか。まず、立ち上がって歩けるようになると、娘は自分でオムツをはずし、私に「ハイ」と言って渡すようになっていた。裸で走りまわっていた。オムツは、暑くて動くのに不便だったのだろう。だからトイレトレーニングは簡単だった。

「あなたがしている所を見せるのがいいです。僕では参考になりません」と夫が言うので、私はトイレのドアを開けたまますることにした。助言をした夫の方は、鍵をかけて入るようになった。娘は、私の真似をして、すぐにトイレを使ってするようになった。子供用簡易トイレ「あひるのオマル」も買って用意したのだが、使うことはなかった。そして、娘はトイレから出て来ると、「丸太に乗った小人さんが、僕にバイバイって手を振って流れて行ったよ」とニコニコして言った。娘たちのアルバムには、長女がトイレを使っているのを次女が指さしている一枚がある。よく見ると、かわいいお尻の下の便器の中には大便が一本写っている。「お母さん、ほら見て太いのだよ。いいウンチ」と言っている次女の声が聞こえてくるような一枚です。「何でも楽しく」が、わが家のモットーです。

カメ

ある日、電話がかかって来た。「もしもし、大きなカメが迷って来ているのですが、お宅の池のカメではありませんか」「ウチのカメではありません」「そうですか」。電話は、それで切れた。

わが家には池があった。その大きさは半端ではなかった。幼稚園のバスが通過すると、御殿場線の線路むこうから水着姿の子供たちが、浮き輪やビーチボールを持って水遊びに来た。中にはお風呂で遊ぶアヒルやジョウロなどの「お風呂セット」を持っている子供もいた。夏休みに、おじいちゃんが年に一度池の掃除をした。バケツが並べられ、コイや金魚がすくい入れられた。池の底にカメがいた。年々成長していたカメもバケツに入れられた。金色のコイは、「すごい」「大きい」「高価そう」と人気で、みんなが眺めたり触ったり突ついたりしたが、だれもカメには興味をしめさなかった。きれいになった池に、カメももどされたが、カメの事は、すぐに忘れられた。

幼稚園に入る前の次女が言った。「ぼくも、だれかをお世話したい」「何がいいかな」。翌日、小田原に行った。小田原駅の東口^{ひがしぐち}、小田原城に行く手前の角^{かど}に熱帯魚を扱っている店があった。店頭でカメを売っていた。生まれたばかりのカメは小さくて、手の中に入った。それを買った。七十円で買えた。家に帰ると、さっそく次女は「お世話」をした。まず、歯ブラシで、甲羅をこすった。甲羅は小さいから、すぐに磨き終わった。一緒に買ったカメのエサを与えた。食べたか食べなかったかわからないが与えた。しかし、「お世話」は三日坊主となった。理由があった。カメは冬眠してしまったのだ。それで「お世話」が終わった。カメは池に放り込んだ。カメの事は、すぐに忘れられた。

おわかりのように、電話の「大きな迷いガメ」は、ウチのカメでした、たぶん。悪

気はなく、家族全員がカメの事をすっかり忘れていた。迷ったカメは、その後、どうなったのでしょうか。今になっては電話の主が、だれだったのかもわかりません。

お祭り

次女が小学生の時、第一生命の向こうの集落のお祭りに行った。「行って来ます」と言って、自転車ですでかけた。友だちや集落、神社の名前は聞いていないので、わからなかった。事件が多発する今日では、ありえない事です。夜遅く帰宅した。「友だちのお母さんから福引券をもらった。その福引が一等で、電気ガマが当たった。私は、二等に当たりたかった」と話しているうちに涙声になった。「そんなに悔しがらなくてもいいのに」と思った。「二等は何だったの」と聞いた。「二等は、米一俵」と言った。娘は、米一俵がほしかったのだ。というより、泣くほど「俵」がほしかったのです。「米一俵は、大きくて持てないでしょう。電気ガマでよかったじゃあないの」「うん」と話がここまで進むと、感極まって本格的に泣きじゃくった。家で待っている母親に、珍しい「俵」を見せたかったのだと気がついたのは、ずっと後になってからです。のん気な親です。大きな電気ガマは、その後十年近く使った。上等の電気カマだった。ところで、子供用の自転車に電気ガマの箱を縛ってくれた人の事を書き添えておきたい。自転車の後ろの荷台にヒモで丁寧に縛ったのは、おじいさんだったそうで、「落ちないように」と言ってしっかり縛ってくれたそうです。お年寄りの仕事ってすごいなと、昨日の事のように思い出されます。それは、結び目も、きっちりした仕事でした。農家のおじいさんだったのでしょうか。私は「娘がお世話になり、ありがとうございました」と、お礼を言いたい。このように、子供は社会が育ててくれるものです。

パンツ帽子

小田急線の新松田駅で小さな娘たちに話しかけて来たおばあさんがいた。「その頭(おつむ)の物は、なあに？」すると長女が元気に答えた、「パンツ帽子！」。そして、スキップをした。続いて次女も、右手の人さし指を高々と上げて、「パンツ帽子！」と叫んだ。二人は自分のパンツを頭にかぶっていた。私は「パンツ帽子」を連れて小田原で買い物をして帰宅した。夏、娘たちは、家では裸で過ごしていた。頭には自分のパンツをかぶっていた。それが定番でした。保育園に入学するまでは、一度も病気をしなかった。元気いっぱい遊んだ。この時期は、裸の写真ばかりが残っている。

それはウソ

朝、ポーポーと鳥が鳴いた。私は夫に話した。「私が、あのポーポーという声は、魔法使いのフクロウの声だよと言うと、娘たちは、怖いよ、お母さんと言って、両側からしがみついて来たんだよ。次女は魔法使いってすごいね、うちの中に来るかしら、こわーいと言って、布団の中にもぐりこんだんだよ。大きくなった娘たちは、お母さんって、ウソばかり教えていたね。私たちは、本当に魔法使いがマントをひるがえしてやって来ると信じたんだよと言った。あとで、さんざん叱られたわ。ほら聞こえるでしょう、あのポーポー鳴く声よ。」

夫は笑った。「あれは、この辺に普通にいるドバトの鳴き声じゃあないか」「そうだよね。だから大人になった娘たちに泣くほどしかられたよ。」すると、夫が面白い事を言った。「あなたも本当に魔法使いのフクロウの声と思っていたのでしょうか」「その通りです。」

同じような事は、まだまだたくさんある。夕方、お寺の向こうから、ウオオーン、

ウオオーンと鳴く不気味な声が聞こえた。「お母さん、あれは何の声かしら」と娘たちが聞くから、「あの鳴き声は、オランダタンの声だよ。よく聞いてごらん、オランダターン、オランダターンという悲しい叫びが聞こえるでしょう」と教えた。そして、『NHKみんなのうた』で放送した『オランダタン』(伊藤アキラ・作詞、惣領泰則・作曲)を娘たちと歌って踊った。本当は、お寺の向こうから聞こえて来た鳴き声は、犬の声で、夕方の町の新しく設置されたチャイムに反応した犬たちが、一斉に吠えたので、不気味な声に聞こえたのでした。夕日の中、本当に「オランダターン、オランダターン」と聞こえたのでした。平和な思い出です。今日、娘に話すと、「そんなことって、あったよねえ」と笑った。

優しい声

平成二十二年(2010年)二月五日、日本テレビ系列『金曜ロードショー』で放映された、『崖の上のポニョ』の映画を観た。ポニョのお母さんの声がすばらしかった。子育てでは、このように「優しい声」ですべきでした。反省をしています。この映画を観て、このような反省をしたのは、私だけでしょうか。教育をテーマにした講演会で「優しい声で子育てをしましょう。これに勝るものはありません」などと言った人はだれもいない。優しい声で子育てをすれば、優しい子が育ちます。怒鳴り声で育てれば、がさつな子に育ちます。

男の子

私は家族で旅行をした静岡の大きなホテルでの出来事を、昨日の事のように覚えている。そのホテルには泊まる予定が無かったのに、車のライトを消し忘れたため、動かなくなったトラブルで、一泊することになったのだ。

広大な芝生の敷地には、大小の池がいくつもあり、まるでゴルフ場のようだった。

ヘリポートには、二機のヘリコプターがあった。それほど大きなホテルだった。

十人ほどの白い帽子をかぶったウエイターが並んでいて、食事の世話にあたった。

フランスからの留学生の青年がいた。日本語がうまかった。

夕飯は、部屋でも食堂でもできたため、食堂で食事をしたのは三組だけだった。男の子二人の四人家族と、中年の夫婦、そして私たち家族。小学生と幼稚園の男の子の家族は、私たちと反対の白い壁のテーブルにいた。明るいシャンデリアの光の中で談笑し、食事をしていた。みんなが器用にフォークとナイフを使っていた。時折、小さい方が何か話すと、みんなが微笑んで、食事は静かに進んでいた。それは、劇場用映画のワンシーンのような美しさがあった。私が「すばらしい家族ね」と言うと、夫は「いつも、あのような生活をしているのでしょうか」と答えた。日本には、「男の子は元気で乱暴なくらいがいい」とか、「男の子は暴れていてもしかたがない」という考えがあるようだが、それは違うと思う。

個性

バレエの発表会があった。会場に行ってみるとリハーサルを終えた次女がいた。ピンクのレオタードを着て、ピンクのトゥシューズを履き、顔は白く塗って、けばけばしいアイシャドウに真っ赤な口紅のメイクをし、頭は髪の毛を上に入れて丸め、ドアノブのような「お団子の袋」(バレッタネットというらしい)を付けていた。私は、今まで見たこともないような娘の姿に驚き、「それって、なに?」と言い、笑い転げそうになった。娘が言った。「みんな同じで、誰が誰だかわからない」と。

学校で、会社で、スポーツクラブで、自衛隊で、みんなが同じ制服を着ると、どう

なるでしょう。制服を着ることによって統一される。大勢を一つにまとめるためには制服は必要と考える人がいるかも知れませんが、しかし、誰が誰だかわからなくなります。つまり個性がなくなります。人間から個性をなくしてしまったらどうでしょう。人は、一人ずつ個性があるからおもしろいのです。そこに夢や芸術が生れます。個性は人が最も大切にすべきものです。

勉強

「お母さんは、何も知らないようだけれども、私たちはいつも、一生懸命に勉強をしていた」と、大人になった娘たちから叱られた。

子供部屋をのぞくと、長女はいつもイスにもたれて、ぼんやりしていた。ノートは机の上に広げてあり、鉛筆を持っているのだが、空を仰いでぼんやりしていた。腰掛けている回転イスが左右に動いている事もあった。どう見ても勉強をしているようには見えなかった。

次女は絵を描いたり、ハサミで切ったり、編み物や縫物をしたり、ラジオのドラマや映画音楽を録音したり忙しそうだったが、こちらも親が期待する勉強にはほど遠い姿だった。

それでも、二人は無事に小学校、中学校、高校を卒業し、大学(あるいは大学院)を卒業。成人し、就職し、結婚した。普通に育った。後日、父親にこの話をすると、「見せてくれた授業のノートは、たくさん書いてあったよ。二人とも、よく勉強していた」と言ったので、驚いた。子供たちは勉強をしていた。それに気が付かなかった私は、のん気な母親だった。

おじいちゃん

父は、昭和十年(1935年)三月に鎌倉師範学校(現・横浜国立大学教育学部)を卒業しました。この時の卒業生が集まって昭十会を作り、時々料亭で料理を食べながら旧交を温めていました。師範学校は寮生活ですから、同じ釜の飯を食った仲間です。会えば話に花が咲いたのでしょう。昭十会の会員は、最初は大勢いたそうです。父は、ずっと会員で幹事も何度かしました。とても楽しみにしていた会です。「足柄上郡の会員が、亡くなったり入院したりして、自分だけになった時、退会したので、その後この会がどうなったかわからない」と言っています。時々、小田原の会員と連絡を取っていましたが、最近は、それも無くなりました。

鎌倉師範学校の寮には、旅芸人の息子がいて、かくし芸で皿回しをしました。コツを教えてもらい、できるようになりました。毎年正月にやって見せていたので、孫(私の次女)もできるようになりました。一緒にやって歓声をあげていました。そのひと時が、小さい頃遊んでもらったおじいちゃんへの恩返しになりました。平成十七年一月三十一日、脳梗塞で右手、右足が不自由になったので、唯一の特技の皿回しは、できなくなりました。また、同期には神主さんの息子もいて、私たち夫婦は、早川にある、この人の神社で結婚式をあげました。春の神社は桜が満開でした。

師範学校では猛勉強したそうです。体が小さかったので相撲をとってはいつも負けていましたが、楽しい寮生活だったようです。この頃の話をする時は嬉しそうです。

同期生は、全員神奈川県内で教職につきました。父も、曾我国民学校、富水小学校、酒匂小学校などで勤めました。それは、父の誇りであり生きる支えです。当時の男子職員は、夜間警備のため宿直制度がありました。学校内に宿直室があり、そこに泊まって夜間見回りをしました。のんびりした時代でした。

長い間、原付オートバイで通勤していました。私が小さかった頃は、私を後ろに乗せて、いろいろな所に行きました。ある日、下大井の農家に梨を買いに行きました。牛の餌箱に買ったのと同じ梨が山ほど入っていました。それを牛が食べていました。今でも覚えているほどショックでした。

夏休みには、毎日のように吉浜や三石海岸、岩海岸に海水浴に連れて行ってもらいました。「夏に肌を焼くと、冬に風邪をひかない」と信じていたため、それは熱心でした。でも、浮輪につかまっていた私は泳げるようになりませんでした。父は国府津の海で育ったので、泳ぎは得意でスイスイ泳いで見せました。その姿は素敵でした。「いくらでも泳いでいられる。なんともない」と言っていました。

四十歳を過ぎて車の免許を取得した事は、特筆すべき出来事です。義母(たつ)を病院に連れて行ったり、孫を乗せて子守や買物、車は大いに貢献しました。

最初の車を買って、母と私を乗せて国道255を走りました。父は得意でした。当時は国道といっても、ほとんど車が走っていませんでした。時折来る対向車の運転手に向かって手を振って挨拶したりしていました。よほど嬉しかったのでしょう。陽気な父の一面です。父に手を振られた人も、嬉しそうに手を振っていました。のんびりした時代でした。一方、助手席に乗った母は、対向車が来るたびに「ぶつかるよ!」「あぶないよ!」と大声を出して騒ぎました。車の事が、全然わかっていなかったからです。母は、車の免許取得に反対でした。

父は、運転が好きで八十三歳までしていました。車を買いかえて、まだまだ運転を続けるつもりでしたが、私が泣きついてやめてもらいました。買いかえるつもり貯金で、孫(私の長女)に車を買ってやりました。脳梗塞になる前、近所のマーケットに乗せて行ってもらい大喜びでした。それは、おじいちゃんへの長女の恩返しとなりました。

た。長女が「行きたい所がありますか。どこでもいいですよ」と聞くと、「マーケットに行きたい」と言いましたが、買いたいものはなく、長女に乳酸菌飲料のバスケットを買ってプレゼントしていました。

学校教育だけでなく、家庭でも教育には、とても熱心でした。私を連れて蝉や蛭を取りに行ったり、小田原の動物園にゾウの梅子さんやライオン、アシカを見に行ったり、松田町の花火大会やお祭りにも必ず連れて行ってもらいました。東京の秋葉原まで、流行りのトランジスターラジオやソニーのテープレコーダーを買いに行ったり、ポリショイサーカスや東京タワーを見に連れて行ってもらったりしました。

ポリショイサーカスは、華やかで夢の中にいるようでした。東京タワーの下では、白い服を着た足や手の無い傷痍軍人が、物乞いをしていました。かたわらには、日の丸の旗がありました。子供の頃、東京に連れて行ってもらった事は、世の中を見る目を育みました。

寝る時には、チャイルドブックやキンダーブックその他、沢山の絵本を読んでもらいました。読みながら、私より先に寝てしまうので、私はよく泣きました。そのたびに、父は、母に叱られていました。

ピアノやバイオリン、童謡のレコード、絵を描く道具や折り紙なども沢山買ってもらいました。今から思うと他の子供に比べ、ぜいたくな事でした。それらは楽しかった思い出です。一人娘の私を、目の中に入れても痛くないほどかわいがって育てました。

父は、養子として、わが家に入りました。結婚以来、学校に勤めながら家事一切と田畑の仕事、それら全てを一人でこなしました。家のために一生懸命働きました。特に、日曜日ごとの田んぼの草取りや稲刈りは、重労働だったと思います。大変だった

事でしょう。買物、掃除、洗濯、皿洗い、縫物、犬猫や鯉の世話。なんでもしましたが、ひとつだけ絶対にしない事がありました。それは料理です。「男子厨房に入らず」と、小さい頃から育てられたためでしょう。どんなに空腹でも作って食べるという事をしません。母が入院した時、ソバの茹で方を教えましたが、その後やることはありません。

多趣味で、ソロバンや習字、囲碁、ラジオ基礎英語、読書、ピアノも自己流でやっていたのですが、どれも長続きしませんでした。ピアノは、『みかんの花咲く丘』『夕焼け小焼け』『月の沙漠』『汽車』などの童謡や唱歌を弾きながら歌っていましたが、『エリーゼのために』は、それっぽく聞こえました。父が、ピアノを弾いているのを配達に来た郵便局員が見て驚いて「今、旦那さんがピアノを弾いておられたのですか」と言いました。以来、しばらくは郵便配達員が来る時刻に練習をしていました。

パソコンにも興味を示しましたが、八十歳を過ぎていたので覚える気力がありませんでした。携帯電話、FAX、CD、DVD、ATMも。今は、生活範囲は家だけとなりました。庭の散歩と新聞を読むのを日課にしています。

これまで(現・平成十七年)盲腸炎以外、入院するような病気はしたことがありませんでした。「徴兵検査の時と、体重と身長が同じだ」というのが自慢です。これは、長寿であることの重要な証言です。また、「九十歳の坂は上るのが大変だ。どこまで生けるかなあ」とも言っています。父は、大正四年(1915年)三月九日、小田原市国府津で誕生しました。

おばあちゃん

母は、足柄上郡金田村金手で大正四年(1915年)一月十五日に誕生しました。昭和五

年三月、静岡県浜名郡教育会設立尋常小学校准教員養成所を卒業しました。浜松の親戚に世話になり勉学に励みました。卒業後、曾我国民学校に奉職しました。この事を知る人は、もう誰もいません。ただ、卒業証書などの書類が証拠として残っているだけです。

教員養成学校は、女性の教員不足から作られたもので、修業年数は一年でした。在学中も自分の母親(たつ)以外の人は知らなかったのも、後日、「学校も出ていないのに教員をしている」と言いふらす人があったようです。

平成十七年(2005年)のある日、昭和十六年(1941年)四月に入学した曾我国民学校一年生の時の同窓会がありました。昭和二十二年(1947年)三月の卒業生です。幹事さんが誘いに来てくれましたが、九十歳となり年齢的に出席は無理なので断りました。それは、五十九年ぶりの再会で、七十歳になった生徒三十四名が集まったそうです。入学の年の十二月八日には太平洋戦争(日本政府は国民に大東亜戦争と呼ばせた)が勃発、五年生の八月十五日に終戦(敗戦)という波乱に満ちた小学生時代を送った人たちです。

母は、ほとんど一年、二年の担任だったので、今まで同窓会に呼ばれる事はありませんでした。誘っていただき有り難い事だと思いました。同窓会の後、何人かの方から手紙や電話をいただきました。「とても優しい先生だった」「穏やかな先生だった」「良く御指導していただいた」と言っていました。これは、以前から何度も聞いていた評判と同じでした。

後日、幹事さんから曾我兄弟の菓子と、名簿、当日の集合写真をいただきました。しかし残念な事に、母には生徒の記憶がありませんでした。さらに、一年一組の入学記念の集合写真を拡大したものもいただきました。母が担任なので中央に写っています。四十一名の子供たちは、みんな素朴な田舎の子です。男子は、丸刈りです。女子

は、おかつぱ刈りです。大きなリボンの付いたセーラー服にスカート、これが制服なのでしょうが、ふだん着のセーターや着物の子もいます。制服の子は、しっかり前を見ているが、セーターと着物の二人の子は、申し合わせたように下を向き口をキュッと結んで悔しそうです。制服を買ってもらえなかったのでしょうか。勝手に想像して涙がこぼれました。前列十二人の女子の内、ズック靴の子は三人だけで、ほかの子は素足に下駄を履いています。白黒の写真は、まるで小説『二十四の瞳』の世界です。後方には二宮金次郎の石像が写っています。このような石像はどこの学校にもありません。

「すごい写真だね。これが、若き日のおばあちゃんだよ。この人に、おじいちゃんは惚れたんだね。りんとして、きれいな人だね」と言って父にも見せました。父が「おお」と言いました。でも、父も、生徒たちの名前や顔に記憶がありません。遠い昔の事だからです。

父も母も教員生活のスタートは曾我国民学校でした。恋愛の末、昭和二十四年(1949年)五月十日に結婚しました。「相州 松田町 蕪木写真館」で撮った婚礼衣装の写真が残っています。子供はなかなかさずからず、あきらめていた頃、私が生まれました。どんなに喜んだかが想像できます。

私が生まれて間もなく、母だけ松田小学校に転勤しました。私がよく泣くので、祖母(たつ)が負ぶって学校まで行き、おっぱいを飲ませたり、顔を見せたりしていたようで、子供を働きながら育てるのは大変な苦勞があったようです。

私は、小さい頃の記憶がほとんどなく、残っている写真や聞いた話によると、最初は三、四人の子守の少女が住み込みでいて、面倒をみていたようです。その少女たちは父の教え子で、知的障害があり、働く場所が無く、自分の生活もやっとな子供たち

でした。私は、食事が与えられず栄養失調となり、風邪をこじらせて肺炎になり、下痢が止まらず痩せ細って死にかけました。さらに、トラホームの少女が、自分で使った手ぬぐいで私の顔を拭いていたため、トラホームが移り、失明しそうにもなりました。イスや滑り台から転げ落ちて頭を打ったり、ブランコに当って骨折したりと、散々だったようです。よく育ったものです。

その後、長く私の世話をしてくれたのは、カッチャンという人でした。この人は普通の娘さんでした。カッチャンは、夏休みや冬休みに暇をもらって家に帰っていました。家は国府津で、御殿場線の松田駅から乗車し、駅前の「梅月堂」で買った「十文字最中」の菓子箱を汽車の窓から投げてくださいました。それは小遣いを渡し、母がやらせていたものでした。嬉しい思い出です。

幼稚園や小学校にあがってからは、母の妹の家にも世話になりました。私は鍵っ子の先駆けという事になります。

私は、オタフク風邪以外、大きな病気をせずに大きくなりました。普通の風邪では、病院に連れて行ってもらうということはなく、家で一人で寝ていました。庭には、大きなタイサンボクやサルスベリの木があり、その花を眺めて寝ていました。それで、いつも治ってしまいました。歯医者にもほとんど連れて行ってもらわなかったのも、虫歯が沢山ありました。私は歯医者嫌い、治療ができないほど泣き叫び、暴れました。歯医者は、ほとほと困ったようです。

家の庭の大きなケヤキの木の下には、卓球台がありました。母は、もんぺ姿に手ぬぐいでほおかむりをして、来客があるとその人を相手に勝負を楽しんでいました。機敏で走るのも早かったようです。賢い人でした。

過去に顔面神経痛で入院をした事がありました。それは、すっかり忘れていきます。

私は父に連れられて病院に見舞いに行ったのを覚えています。母は、気が早く神経質な性格です。

二十年の教員生活の後、退職しました。この教員生活が、一生のうちで一番華やかだった時だと思います。

退職してしばらくすると、自分の母親(たつ)の介護が始まり、どこにも出かけられなくなりました。介護は家で父と母がしていました。母が食事の世話やトイレの世話をし、父が車で、毎日病院に連れて行っていました。最後は、病院から先生が点滴やタンの除去に往診に来てくれました。自分で入浴できなくなると、父が抱きかかえて一緒に入り、母が介助しての、文字通り二人三脚の介護でした。寝たきりの状態は七年以上になりました。家の中から笑いが消え、だれもが次第に無口になりました。

洋ランの栽培を楽しむつもりで建てた二棟の温室は、放置されました。今では朽ち果てています。介護が終わって気がつけば、自分たちは年老いてしまっていました。温室で洋ランを育てて楽しむ元気は、もう無くなっていました。花が好きな母は、洋ランに囲まれた老後が夢でした。

この介護は、私が高校生から結婚した年まで続きました。私の青春時代と重なります。

貞子さん

貞子さんは夫の母親です。俳優の京塚まさ子さんに似ていました。

ある日、映画『砂の器』(松本清張・原作)の話になりました。テレビで放送されたばかりだったからです。お母さんも山形で観ていました。「主演の加藤剛がステキ」と話が盛り上がりました。

村を追われた捨て子が、作曲をし、ピアノを演奏し指揮をする音楽家になる話は、ありえない事ですが、話の展開としては華やかでドラマチックです。加藤剛がピアノを弾くシーンにしばれました。なんと、お母さんと「好きな男性のタイプ」が同じでした。

お母さんは、その後、平成十一年九月二日に癌で亡くなりました。七十三歳でした。「あなたがた二人は、^{しんしょく}寝食を忘れて一生懸命勉強に打ち込むタイプだから、体に気をつけるように」と言われた言葉を覚えています。私たち夫婦は、今勉強に次ぐ勉強の充実した日々を過ごしています。思い残すことのないように頑張ります。

雅夫さん

五月のある日、突然横浜に住んでいる夫の弟の雅夫さんから電話があった。「モズクは今が旬なので、食べるといいですよ」そう言うと電話は切れた。用件はそれだけだった。それからしばらくして雅夫さんは母親と同じ癌で亡くなりました。平成十九年八月八日、五十五歳の若さでした。

「モズク」は、スーパーで酢の物になったものが売られています。食前に食べると体内が活性化し、成人病の予防になる注目の食材です。四月から六月までが旬です。モズクを食べると雅夫さんの電話を思い出します。夫は、「雅夫自身は、モズクなんか食べていなかったと思う」と言っています。きっと、だれかから聞いた話に感動して、教えてくれたのでしょう。モズクを食べて元気に生きたいものです。

名前

「今どき」の名前

今どき(平成二十二年五月)の名前を挙げてみます。あなたはいくつ読めますか。

大翔(ひろと)、大雅(たいが)、翔太(しょうた)、蓮(れん)、颯(はやて)、颯太(そうた)、蒼空(そら)、颯真(そうま)、悠斗(ゆうと)、瑛太(えいた)、悠真(ゆうま)、翔(しょう)、歩夢(あゆむ)、凜(りん)、陽菜(ひな)、結愛(ゆあ)、美羽(みう)、結衣(ゆい)、葵(あおい)、美優(みゆ)、結菜(ゆな)、美咲(みさき)、莉子(りこ)。いつからこうなったのでしょうか。

「予期せぬ」名前

私は、長く保育園や幼稚園に呼ばれて童謡や唱歌を歌ったり、遊んだりする指導をしてきました。最初の頃は、ホールいっぱい子供がいたのに、二十年が経過すると、驚くほど少なくなりました。しだいにマイクを向けて名前を聞いても、言われた名前が聞き取れなくなりました。昔の名前は聞き取れなくても、だいたい予想がつかしました。しかし、今どきは「え？ もう一度」と聞き返してもよくわかりません。想定外の名前だからです。何回も聞き返すと男の子が私を指さして「この人、耳が悪いんじゃないの」と言いました。若いお母さんたちが、どっと笑った。ある時、「お名前は？」と私が聞くと、その女の子は「まりあんぬ」と言った。もう、ついて行けません。これで思い残すことなく、保育園や幼稚園での指導を辞めることができました。その後も「グッチさんのように」とか「のっぽさんのようにやってください」と依頼がありましたが、期待されているのは、テレビの影響を受けた出し物で、童謡や唱歌では対応できなくなっていました。『だんご三兄弟』の歌が爆発的なヒットを飛ばした頃のことです。

今、保育の現場で、保育士や親、子供たちが求めているものは、ストレスを発散させるために体を動かしながら歌える、激しいリズムの歌です。私は、落ち着きのないうちが育つのではないかと心配しています。

「あいこ」という名前

平成二十二年(2010年)、NHK朝の連続ドラマ『ゲゲゲの女房』は、国民的人気です。漫画「ゲゲゲの鬼太郎」の作者、水木しげるの妻(武良布枝)が主人公です。六月八日の放送では、女の子が生まれ、父親が「^{あいこ}藍子」と命名しました。その場には兄夫婦がいました。兄は口の悪いずうずうしい人なので、何を言うかハラハラしましたが、「ええ名じゃ」と手放して喜びました。奥さんも、もちろん「いい名前ですね」と喜びました。私は、どうなる事かと、ドラマの成り行きを心配して観ていましたが、安堵しました。テレビに向かって拍手したほどです。でも、「ちょっこし書くのが大変かな」と思いました。翌日も放送を見ました。商店街の主婦仲間がお祝いに来ました。そして案の定口々に言いたい放題でした。「この漢字って難しいわねえ」「画数が多いと学校で書く時、困るわねえ」、「いいじゃないの、平仮名で書けば」、「あいこって平仮名で書いたらジャンケンしているみたいじゃあない」、それを聞いた水木しげるの奥さんが「ジャンケンか、気付かなかった」と言いました。のん気な奥さんです。今だったら「あいこでしょ」などとはやし立てられ、いじめられます。

人は、いろいろな事を言うものです。最後に貸本屋の奥さんが「子供って、育てるのは大変だけれども、過ぎてみれば幸せな時だったと思うものよ」と言いました。

「マリ・キュリー」という名前

小学校の同級生の一家がお寺の離れに住んでいた。だから私は、ほとんど毎日お寺で遊んだ。お寺は古くて、竹藪でおおわれ、裏には墓地があり、うっそうとして気味が悪かった。ある日、友だちが嬉しそうに言った。「私は偉人の『キュリー夫人』と同じ名前よ。これから『キューリー・マリー』と呼んで」と。そして、「キュリー夫人伝」を見せてくれた。私は、その本を読み、感動して、偉い人と同じ名前がいいなあと思

った。私も一緒に大喜びをした。そして、「キューリー・マリー」と叫びながら墓場を駆け巡った。

大人になって、時々思い出して笑ってしまう。彼女の名前は「木内鞠子」といった。五十年も前のできごとです。

(註)マリア・スクウォドフスカ・キュリー(1867年11月7日~1934年7月4日)は、現在のポーランド出身の物理学者・化学者。フランス語名はマリ(マリー)・キュリー。ワルシャワ生まれ。キュリー夫人として有名。放射能の研究で、1903年のノーベル物理学賞、1911年のノーベル化学賞を受賞し、パリ大学初の女性教授に就任した。

「岩下俊介」という名前

私が高校生の時、英語の先生が自己紹介で黒板に名前を書いた。岩下俊介と書いた途端、生徒が一斉にクスクスと笑った。先生は振り返ると、「きみたちは何がおかしいのか」と怒った。生徒は、単純に、「すけ」というのがおかしかっただけだった。

「岩下志麻のいここです。これから楽しく英語を勉強して行きましょう」と自己紹介を結んだ。当時、岩下志麻が、かの有名な美人女優と認識していた生徒はいなかった。先生は、背が高くインドのガンジーのようであった。先生は、東京大学文学部英文科を卒業していたが、英語の授業は少しも面白くなかった。発音記号による発音、そして三人称だの所有格だのの文法の繰り返し。試験では虫食い問題が決まって出題された。文中の空欄、カッコの中に何の単語が入るか当てる問題だ。私は、いろいろな単語を入れて見て、どれも、これも当てはまるなどやっているうちに時間が来て、ほとんどを埋める事ができなかった。クイズの正解はひとつではないと今でも思っている。

「東大卒 = 勉強ができる」というのと、「教えるのがうまい」というのは、別物だと知った。この先生が流暢に英語を話すのを聞いた事がなかった。外国に留学したとか、

外国に行ったという話も聞いていない。本当に賢い人には余裕がある。先生には、その余裕がなかった。私を含めて多くの生徒が英語嫌いになった。

英語の授業はほとんど一時間目にあったから、私は、一時間目を遅刻することにした。後日、卒業の近くになって担任から呼び出され、「あと数回遅刻すると英語の単位が取得できない。卒業が危ない」と告げられた。それほど英語が嫌いになっていた。

この先生は、ハイネの詩集をカバンに入れて持ち歩くほどのインテリだったが、気難しかったので、生徒が誰も近づかなかった。生徒の方に勉強への意欲がもっとあれば、深い知識が得られたのではないかと思う。ヘビースモーカーで、休み時間や歩きながらでも、タバコを吸っていた。私たちが高校を卒業するとまもなく、肺癌で亡くなった。

高校は、一学年にたった二クラスという学校だった。入学試験の時の事を鮮明に覚えている。雪が降って首都圏の電車が遅れたため、試験は一時間延びた。私の受験番号は一〇〇番だった。そのため父も母も「合格だな」と単純に思い込み、心配をしなかった。受験生は、私の後にも沢山いたのに。

入試は国語と英語と面接で決まった。午後の面接の時、面接官の先生(後日その人が校長とわかった)が、「試験はどうでしたか。なかなか良い成績です。発表を楽しみにしていて下さい」と奇妙な事を言われた。試験オンリー、一発勝負。私は合格した。父も母も中学の担任も、私の入学試験を心配していなかった。したがって合格を喜ばなかった。私と一緒に喜ぶ人は誰もいなかった。この年の合格者は、たった三十四人だった。

高校時代は、ただひたすら電車通学片道三時間、一日往復六時間を電車の中で立って過ごした。車酔いの激しい私は、頭の中が、いつもぼんやりしていた。それが高校

生活の普通の日常だった。高校時代は、ほとんど話さず、日が過ぎて行った。けれども、それで満足だった。高校生活は、のんびりと過ぎた。楽しい事も苦しい事もなく、ただ自由で、平凡な日々が過ぎた。時代を先取りするように学校は土曜日が休みだった。夏休み、冬休み、春休みの他に、試験休みがあった。私はこの高校生活が気に入っていた。朝礼や放課後のクラブ活動もなく、掃除当番もなく、六時間目の授業が終わると、みんなすぐ帰宅した。全員が遠方からの電車通学だったからだ。ホームルームもなく、昼休みに必要事項を担任が伝達に来た。「明日は、レントゲン検査があるので、ブラジャーは取って来るように、後ろの金具が」などと言って、担任は真っ赤になっていた。早稲田大学を卒業した社会科のその担任も、若くして癌で亡くなった。尺八を趣味としていた、おおらかな人だった。

「たなし」という名前

高校に教育実習生が来た。「次、たなしさん、読んで下さい」と言った。すると、みんながドツと笑った。教育実習生は、なぜ笑われたかがわからなくて戸惑った。笑われたので授業が続けられないほど、あがってしまった。指名された生徒は、「東京都田無市」から来ていたので、愛称で「たなし」と呼ばれていたのだ。活発な人で、みんなに人気があった。しかし、今、彼女の本名を思い出せない。何という名前だったのだろう。顔も思い出せない。教育実習生は、大学を卒業すると、私の高校の英語の先生になった。

(註)^{たなしし}田無市は、かつて東京都に存在した市。平成十三年(2001年)一月二十一日に保谷市と合併し西東京市となった。

「アンドーナツ」という名前

「私は、“安藤夏”という名前です。童謡を歌うのが大好きです。これから、お仲間に

入れていただきますので、どうぞよろしく申し上げます」と、その人は自己紹介をした。みんなが拍手して、その場は終わった。そして五年後に「東京、日野市の娘の家で世話になるので、これでお別れです。老後は、やはり娘の所が一番です」と言って童謡の会を退会して行った。彼女の名前は“アンドウナツ”といった。

ある日、夫が「僕の教え子の安藤という生徒が、『私のおばあちゃんの名前は、“安藤奈津”なの、おかしいでしょう』と言って放課後、盛り上がっていた。嫁いなら“アンドウナツ”になったなんて、全く面白いね。お嫁に来る前は、何という姓だったのだろうね」と話した。“アンドウナツ”という名前は、どこにでもありそうです。結婚して姓が変わり一番驚いたのは“アンドウナツ”さんだろう。

「三平」という名前

大学の入学式は、各学部ごとに名前が呼ばれた。音楽大学なので、それほど人数は多くなかった。「三平ミチコ」と呼ばれた時、みんながどっと笑った。「三平」という名前が、落語家の「林家三平」と同じだったからという理由だった。ただそれだけの理由で、別に悪気があったわけではない。

大学の卒業式でも各学部ごとに名前が呼ばれた。入学式のときよりも人数が少なくなっていた。そして最後に成績優秀者の名前が発表された。全学部のトップの名前が読み上げられた時、その場にいた全員が「おお!」と声をあげた。トップは「三平ミチコ」さんだった。後日、三平さんが、事務の窓口で妹の合格手続きをしているのを見た。妹も、この大学に合格したらしい。事務長さんが、「妹さんも優秀で、楽しみです」と話していた。三平さんは嬉しそうだった。

「ドンガバチョ」という名前

人気といえば、中学の先輩に「ドンガバチョ」と呼ばれていた男の子がいた。気真

面目で、みんなのまとめ役でした。その、おおらかな性格は、好い家庭で、すくすく育ったというような人でした。ある日、週番になり、朝礼台に立ちました。「みなさん、聞いて下さい。もうすぐマラソン大会があります。各学年で、まとまって練習をしていると思いますが、トン・ズラをする人があるそうです。しかし、それは、いけません」と演説をした。下級生から手が上がった。「トン・ズラってなんですか」「トン・ズラとは、ずらかって、いなくなってしまう事であります。つまり、マラソンの練習中に、いなくならないように。ちゃんと、練習すべし。わかりましたか」。全校生徒が笑い、納得し、「ドンガバチョ」先輩を尊敬しました。彼は、大学を卒業すると、中学の理科の教師になったと聞いています。「ドンガバチョ」先生は、きっと人気の先生でしょう。

「麗子」という名前

私の大学の時の先輩の高田麗子さんが嘆いた。「私の名前は、書道の時とても困るのよ。字はうまく書けても、最後に署名する時、「高」と「麗」の漢字で失敗になってしまう。この二つの漢字が大きくなって、ひどい事になるの」と。筆で書いてみると、「高」と「麗」の字が大きくなる。なるほどと思った。でも、好い名前だ。彼女は、大学を卒業すると国立音楽大学附属音楽高校のピアノの講師になった。もう、筆で名前を書くことはないかもしれない。

娘の名前

娘の名前は長女が「泉」といいます。ピアニスト館野泉さんと蜘蛛の研究者であった萱嶋泉さんの名前をいただきました。私の母が「泉という名前がいい」と大賛成をしてくれて、すぐ決まりました。この名前は、当時は珍しく、ピアノ教室に来ていた女の子が「変な名前」と言い、付き添っていた母親が、あわてて「そんな事を言うも

のではありません」と注意していた。次女の名前は「姉が淡水だから妹は海水にしよう」ということで、生物の教師であった夫が「千洋(ちひろ)」と命名しました。私たちは生まれてくる子に期待し、良い名前だと喜び合いました。名前を考えるのは、とても幸せでした。『名付けの本』や『よい名前の本』なども沢山買いました。現在、二人とも結婚して親の期待に十分応えてくれています。名前も気に入ってくれています。

「博明」という名前

「博明(ひろよし)」は、私の夫です。山形の父親が苦心の末つけた名前だそうです。長男が生まれた喜びが伝わってくる名前です。これは普通「ひろあき」と読む。「ひろよし」と読めるのは、私の家族と親戚しかいない。なぜ、このような読み方になっているのかを本人に説明してもらった。

「よしという名前を付けたかったという。祖母が「よしを」だし、叔母もよしのつく賢いひとだったそう。幸田露伴の編集した漢和辞典に明の名前の特殊読みとして出ている」ということだが、難しい読み方も、なれてしまえば、どうということもない。生まれた時からこの名前と付き合っている娘たちは、お父さんの名前について、不満を言ったことが無い。

「小百合」という名前

私の本を手にして、酒屋の社長が「この名前は、俺たちの世代じゃ、憧れなんだよな」と、しみじみと言った。彼もまたサクリストだった。つまり、女優・吉永小百合の熱狂的なファンであった。だから、私は、この名前が嫌い。名前を口にするたびに負い目があります。

病院でも名前を呼ばれると、「先生が、どんな美しい、清らかな人が入って来るかと期待をしているだろうな。困ったな」と思ったりする。気恥ずかしい。意識過剰です。

『冬の星座』(作詞・堀内敬三、作曲・ヘイズ)という歌には、「木枯らしとだえて さゆる空より・・・」という歌詞があり、小さい頃は意味もわからず「さゆる」は、「さゆり」かと思い、自分の歌と思ひ込み、冬の夜空に向かって歌った。大声を張り上げて歌ったのを覚えている。歌は好きで、いくらでも歌い、気分が良かった。

この名前は、父親が気に入ってつけた。名づけた時は、まだ吉永小百合は女優として存在していなかった。ラジオでドラマを放送していて、その主人公が「さゆり」だったらしい。同世代に「さゆり」、「小百合」、「百合子」、「ユリエ」が多いのは、そのためようです。どのようなドラマだったのでしょうか。

今年(平成二十三年)でいえば、『マルマル・モリモリ』という歌が流行ったので、歌っている芦田愛菜ちゃんの「愛菜」という名前が、今年赤ちゃんに付けられた名前のベストワンになったようなものです。

玄関に百合の花の油絵が飾ってあります。素人の絵です。額縁も絵を描いた人が作ってくれたそうです。百合の花びらをかたどった彫刻がほどこしてあります。私が生まれた事を喜んでくれ、名前が小百合だと知ると百合の花を描いてくれたのだそうです。近所に住んでいた人ですが、名前は聞いていません。ローマ字でサインがありますが判読できません。

私が誕生した事を、父と母と一緒に喜んでくれた人が、もう一人いた事に気がつき、感謝をしたのは五十歳を過ぎてからの事です。玄関に来た人が、百合の花の絵に気がつくことはありません。

喧嘩

喧嘩は時間の無駄です。若い頃は、よく夫婦喧嘩をしました。それとは知らずに通

りかかった猫が私に投げられて空を飛んだり、のん気にヨーグルトを食べていた娘のヨーグルトが奪い取られてダンスに当たったりした。大きくなった娘たちは、私たち夫婦の喧嘩をよく覚えていました。「原因は、ほとんど同じことの繰り返しだ」と長女が言いました。その分析は正しい。喧嘩の原因は親の事、他の家庭の事、子供の教育方針の違いが主な原因でした。

今は、喧嘩をしていません。喧嘩の原因がなくなったからです。喧嘩をしなくても、思いは通じるものです。思い返すと、喧嘩は百戦百敗、わめいたり怒ったりした私の負けでした。私は喧嘩をした事を恥じています。

箱根八里

箱根には沢山の保養所や旅館、ホテルがあります。娘たちが小さかった頃、おじいちゃんが運転する車に乗って一泊旅行に行きました。

宴会場で夕食になりました。箸袋に『箱根八里』の最初の歌詞が書いてありました。それを見た娘たちが「この歌は、お母さんが歌えるよ」「お母さんは、歌が上手なんだよ」と配膳係の人に言いました。すると配膳係の女性が、「じゃあ、歌ってもらおうかしらね」と拍手をしたのです。まわりにいた人たちも拍手をしました。「ひとつ、歌ってやれよ」とおじいちゃんまで言いました。もう、後に引けなくなり、歌い出すと、手拍子が入り、みんなも歌い出しました。宴会場は大合唱となりました。みんなが知っていて歌いました。大勢の大人に交じって、娘たちも手拍子をし、嬉しそうでした。おじいちゃんはお酒が入って上機嫌でした。『箱根八里』を歌うと、この時の事を思い出し、冷や汗が出ます。さぞ、作曲者の瀧廉太郎は驚いたことでしょう。箸袋に『箱根八里』の歌詞が書いてあるとは洒落ています。どこに一泊したか旅館の名前を覚え

ていません。

園長先生

私は、ずっと気になっていることがあります。それは、最初に娘たちを入学させた保育園の園長代行をしていた女の先生が、「子供たちにテレビを見せてください。子供を連れて行けない所を見せるようにして下さい」と言われた事です。平成二十三年(2011年)二月十六日、NHKテレビでは『世界遺産』“中国の密教・仙人が住む山”を放送した。すばらしい風景に感動でした。一生行かない所を見ることができた。テレビは、活用の仕方によっては高い知識が得られ、そして楽しい。

はらたいらさん

娘たちは小学生の時、朝日こども新聞の記者になった。夏休みには大手シーフードの加工食品会社の協賛で一泊の合宿があった。ゲストは、漫画家のはらたいらさんで、『はらたいらさんと合宿をしよう』というものでした。帰宅した次女が興奮してこう言った。

「はらたいらさんは、すごかったよ。漫画を描く時は、その漫画の人物になりきって描くんだって。笑っている時は、自分も笑いながら描く。寝ている時は、自分も寝ながら描くんだって。すごいね。初めてのバーベキュー以上に、はらたいらさんの漫画の話は娘たちを興奮させたようでした。

後日、朝日こども新聞の一面に、はらたいらさんを囲んだ子供たちの写真が掲載されました。娘たちはイスに座ったはらたいらさんの後ろにいました。楽しそうです。

私は、テレビのクイズ番組に出演していた、はらたいらさんを覚えています。物知りでハンサムな人でした。その漫画は子供向けではなかったのも、なぜ『はらたいら

さんと合宿しよう』だったのか、今でも謎です。

竹久夢二

次女に『浜辺の歌』の挿絵を描いてもらうように頼んだ。すると、すぐに着物の女性を描いて持って来て言った。「竹久夢二の描いた女の人は、足を捻挫しているよ」かの有名なセノオ楽譜『浜辺の歌』の挿絵をよく見ると、本当に足の描き方がおかしい。「これは捻挫だ」。娘の言葉を夢二が聞いたら、さぞ驚くことだろう。

ターキーさん

ある日、童謡の会で『オウマ』（林柳波・作詞、松島つね・作曲）「おうまのおやこは なかよしこよし」を歌いました。馬に関連する話として、娘たちが小さい頃好きだったターキーさんの馬について話しました。

「神奈川県の大井・松田乗馬クラブには、ロイジェームスさんの大きくて立派な茶色と黒い毛の競馬用の馬と、水の江滝子さんの白い毛の小さな馬がいました。娘たちは、小さな馬をポニーさんとか、白ちゃんと呼んでいました。家でできたニンジンを持って、おじいちゃんの車で毎日のように遊びに行っていました。時折、ロイさんもターキーさんも来ていましたが、みんな亡くなってしまいました。その後、馬はどうなったでしょう」と言うと、中井町の『童謡を歌う会青い鳥』の会場から「ターキーさんは生きています」と声がかかりました。「そうね」と、みんながうなずいています。私は「あれれ」と思いました。

インターネットで検索すると、次のように書いてありました。「水の江滝子、大正四年(1915年)二月二十日生まれ。日本の女優、映画プロデューサー。戦前は松竹歌劇団に所属し、男装の麗人の異名をとる。(ターキー)の愛称で親しまれる。NHKの人気

テレビ番組『ジェスチャー』の赤組キャプテンで知られている。平成五年(1993年)に生前葬を行い、関係者を驚かせた。別のインターネットのサイトには、「二回目の生前葬もやった」と書いてありました。私が持っている本『生前から考え、準備しておく自分らしい葬儀』(小学館)には次のように書いてあります。「水の江滝子さんが七十七歳の最後の日に行った生前葬。参会者五百人の明るくなごやかな式になった」。写真は、綺麗な衣装のターキーさんが、一人々にお別れを言っている様子です。私は、これを見て亡くなったと早とちりしたのです。

水の江滝子さんは、亡くなっていませんでした。そればかりか、大正四年生まれですから今年(平成十七年)九十歳です。本名は三浦ウメ(子)といいます。名前を見ると、大正生まれを実感します。ロス疑惑の事件以来、三浦和義被告の関係者と噂され芸能界を引退し、住所は秘密なのだそうです。昔、新聞のインタビューで、「秦野付近の小さい丘の一軒家に一人暮らし。雨の日が好きで、新築の家に雨どいをつけなかったのは、雨が地面に落ちる音を聞いて静かに暮らしたいから」と、あった気がします。

中井町の童謡の会の会員によると、高台で見晴らしがよい中井町境別所に住んでおられるようです。

「ああいう人は、派手だな」というのが、おじいちゃんのターキーさんに対する感想です。娘たちは、「おじいちゃんの車で、毎日行って、ターキーさんの白ちゃんに家から持って行ったニンジンを食べさせて遊んだ」と覚えている。水の江滝子さんのポニーの名前は、ショウちゃん(晶太号の愛称)。ムツゴロウ(畑正憲)さんにもらったのだという。畑正憲著『ムツゴロウの馬読本』(文芸春秋)の「ターキーさんと晶太」に、この馬の事や大井・松田乗馬クラブの事が詳しく書かれています。ターキーさんは平成二十一年十一月に九十四歳で亡くなりました。

柏戸さん

八月の第一土曜日と日曜日は『山形花笠まつり』です。これは、神社ではなく商工会が作った独自のパレードと踊り中心のお祭りです。この祭りのために、踊りの付いた「花笠音頭」が作られました。踊りが、どの祭りより華やかなのは当然です。だれでもすぐ踊れます。子供たちが小さかった頃、家族全員で見に行きました。七日町の中央の通りに出ると、パレードが始まっていました。警察官待機所の仮設テントの前で警察官の義父が、立派な帽子をかぶって部下の警察官を従え、中心に座っていました。みんなで手をふる、嬉しそうに笑いました。パレードの終りは、オープンカーに乗った第四十七代横綱「柏戸」の登場です。ひときわ大きな拍手が響きました。かつて大鵬と柏戸戦をテレビで観ていた私は興奮して「まあ、柏戸よ。ほら、ほら」と叫びました。すると娘たちは、「柏戸ってだれ？」と言いました。「山形出身の、お相撲さんだよ」と、お父さんが言っても、わかりませんでした。娘たちは、圧倒的に強かった柏戸を知りませんでした。オープンカーに座ったその男の人は、普通の人より少し大きいおじさんでした(現役時代の体格は188センチ、144キロ)。

平成八年(1996年)十二月八日、「柏戸が亡くなった」とテレビニュースを見た時、相撲ではなく、このパレードの事が鮮明に思い出されました。柏戸は、生まれ故郷(山形県鶴岡市出身)の人々に囲まれ嬉しかったことでしょう。わが家族も全員元気で幸せな時でした。私は、このパレードの事を時々思い出します。みんなの笑顔を思い出します。

サンタクロース

次女が小学校二年生の時、町内商工会のクリスマス抽選会で一等を当てた。一緒に

行ったおじいちゃんが、「一等はポットや電気ガマ、ビデオデッキなどの日用品か、サンタクロースのプレゼントだった。本人が、『サンタのプレゼントがいい』と言うから、そっちにした。二十四日のクリスマスイブにサンタがプレゼントを持って家に来るそっち」と言った。どうやらおじいちゃんは日用品の方がよかったようだった。

二十四日、クリスマスイブの日、夜九時を過ぎてもサンタは来ません。おばあちゃんが「電話をしてみたら？」と言いました。十時近くになって、ほっそりした若いサンタクロースが袋を肩にかついで玄関に来ました。白いひげを付けています。「メリークリスマス。いろいろな所をまわっていて遅くなりました」と、しきりに弁解して、娘たちにプレゼントを手渡しました。プレゼントは、キャンディーブーツやロールケーキ、チキンのから揚げ、紅茶セット、シャンパン、ハンカチ・靴下セットなどで、娘たちだけでなく、家族みんなで楽しめるものでした。サンタクロースは、かなり酒に酔っていました。忘年会の後、来たのでしょうか。「写真を撮らせて下さい」と言うと、ピースをして応じてくれました。私は、サンタと娘たちだけを撮りたかったのに、お父さんと、おじいちゃんが、いつまでもその場にいました。みんなが、サンタと写真に納まりたがりました。「ご苦労様でした。好い記念になります」と、大人たちがサンタと挨拶していると、次女が外に飛び出して行きました。そして、すぐ戻って来て「サンタはライトバンで来た。運転席のおじさんはタバコを吸っていた」と泣き声で言いました。“しまった、トナカイを見に行ったのだと気がついたのは、ずっと後の事です。サンタはトナカイに乗って来るはずでした。本気で泣いていたかもしれせん。

サンタクロースと一緒に写した写真が出来上がると、学校に持って行きました。みんなに見せたのでしょう。学校から帰った長女が「先生が、『このサンタは誰なの?』って聞いたよ」と言いました。私は返事に困りました。「サンタはサンタだよ」とも

かく、これが家にサンタクロースが来た、最初で最後でした。そして娘たちのクリスマスも終わりました。

以後、わが家では、お父さんがクリスマスケーキと、キャンディーブーツを買ってくる係、おじいちゃんがロウソクを出し入れする係りになりました。お父さんは晴れがましく、いかにも嬉しそうでした。おじいちゃんは、「来年も、ロウソクが出せるといいなあ」と呟いていました。私たちはケーキを黙々と食べました。それは小学生の間、続きました。

クリスマスケーキには、美しく楽しい夢があります。キャンディーブーツは履いたりして、いつまでも楽しんでいました。クリスマスを批判する人があるようですが、子供の楽しみを理解してやってほしいものです。サンタクロースと本気で向き合えるのは小学校の時だけだからです。子供の心にロウソクのキラキラした光を残してやりたいものです。

もう一つ、長女は成人してから小田原の地下街のクリスマス福引会で一等が当たった。「フランス・パリ5日間の旅」だった。一等は横須賀店、平塚店、小田原店で何本もあり、団体旅行だったので、楽しかったようです。写真を見せてもらい、思い出話を聞きました。サンタのクリスマスプレゼントは海外旅行でした。

老舗の味

「老舗の味」という言葉がある。神奈川県小田原市には『だるま』という老舗の料亭がある。寿司と天井が有名です。ある日、映画を観に行った帰りに娘たちを連れて立ち寄った。座敷に上がって、何が食べたいか聞くと、「カレーライス」と言うので注文した。しばらくすると大きなお皿にカレーライスが盛られ、わきに赤い福神漬が付い

てきた。娘たちは、紙に包まれた大きなスプーンに興奮し、競って食べ始めたが、味が大人向けだったので、辛くて何杯も水のお代わりをした。最初、次女が「お水のお代わり」と言い出したものの、恥ずかしくて自分ではもらいに行けず、「私が行って来てあげるわ」と言って長女が二人分、新しいコップに水をもらって戻って来た。なれてくると、次女も調理場へ水をもらいに行った。水のお代わりは食事が終わるまで延々と続いた。私は娘たちの勝手にさせておいた。別に水をもらいに行くのは悪い事ではないし。

そもそも、老舗の料亭『だるま』で、その味もわからない子供に食事をさせるというのが間違いでした。我が家のカレーライス、ジャガイモと人参と玉ねぎの具沢山の「甘口・ハウスバーモントカレー」と決まっていた。この『だるま』のカレーライスは、ご飯にカレールウがかかっているだけで具がほとんどない。じっくり煮込んだ大人向けの辛口だった。

食事が終わると、「ぼくたちのお口には合わなかったね」と次女が言い、長女も「そうだね」と言う感想だった。娘たちにかかっては老舗の味も形無しだった。この時、店の中でカレーライスを食べていたのは私たちだけだった。思い出すたびに笑ってしまう。

タイタニック

小田原に正月映画を観に行った。いつも姉妹一緒だが、なぜかこの時は次女だけだった。オリオン座映画館ではアメリカ映画『タイタニック』(1997年)を上映していた。ほぼ満席。人気の映画だった。この映画は、実際に1912年に氷山に衝突して沈没したタイタニック号の事故を描いたもので、貧しい青年ジャックにレオナルド・デカブ

リオが、上流階級の娘ローズにケイト・ウィンスレットが扮した。前半はラブストーリー、後半はパニック映画で、ラストには悲劇な別れがある。私は、三十分もするとあきてしまった。最後に百歳になったローズが思い出の品であるグリーンのダイヤを海に落としてしまうシーンで「もったいない」と思ったのが、一番の感想だった。

映画が終わると、さっさと帰り支度をして席を立った。後からついて来た娘が、映画館の出口で言った。「お母さんは、よく平気だねえ」と。振り返ると、娘は目にいっぱい涙をためていた。「おや？どうしたかな。映画のパンフレットも、ポップコーンも買ってあげたのに」と思った。映画館を出ると、箱根駅伝が通り抜けた後で、応援の旗が、国道のあちらこちらに捨てられていた。夢の後であった。娘は映画のパンフレットを抱えて、とぼとぼ私の後について来た。私は、「来年は、映画でなくて、駅伝の応援に来よう。映画は長かったね」と言って、その場を切り抜けた。「主人公のジャックが海に沈んで行った所で、かわいそうで泣いていたのだった」とわかったのは、ずっと後になってからでした。

娘はその後、自分で映画を観るようになり、映画から英語に興味を持った。出演者の顔と名前も驚くほどよく知っている。

箱根駅伝

『タイタニック』の映画を観た翌年の一月二日、次女と一緒に小田原に箱根駅伝を見に行った。すでにテレビでは東京をスタートしていた。小田原市民会館の先の幸ヶ^{みゆき}浜通りは、まだ人もまばらで、大学の名前が書かれたノボリが各所に立っただけだった。そこにオートバイに乗った男の人が来て、読売新聞社のマークの入った旗の束を、私と娘に渡して「配って下さい」と言った。そしてオートバイは走り去った。

国道の下り車線、箱根方面に人が集まり始めたので、「応援の旗をどうぞ」、「応援をよろしく願います」、「どうぞ」、「はい、どうぞ」と言って配った。旗を差し出すと、だれもが受け取った。断る人はいなかった。中には「ください」ともらいに来る人もいた。私は気を良くして「私が応援の旗を配っていますよ、まだ、ありますよ、みんなでも応援しましょう、元気に応援しましょうね」と調子に乗って配り、すぐに旗の束はなくなった。おもしろかった。娘を見ると、まだ旗をぜんぶ持っていた。「どうしたの?」「だれも、もらいに来ない」「どうぞと言って、どんどん配るんだよ」「でも」放っておくと、娘は一本、また一本と渡して旗配りは終了した。「渡せて、よかったね」「うん」娘は緊張して固まっていた。

東から国道を箱根駅伝の選手が来た。先頭の方は、白い上下のユニフォームが朝の光の中に輝いていた。両側を白バイが付き添っている。晴れ舞台だ。「頑張れ、頑張れ」旗を振って応援した。清々しい青年が目の前を駆け抜けて行った。次の方は、なかなか来なかった。二番目の人が通過した後は団子状態で、次々に通過して行った。速い。若い風が駆け抜けて行った。「頑張れ、頑張れ!」。だれかれかまわず声をかけた。それは、自分自身への応援でもあった。もう終わりかと沿道の方が帰りにかけた時、ラストの方がカーブを曲がって来た。よろよろしている。「頑張れ!」「しっかり!」「それいけ!」「もう少しだぞ!」。その場にいた人が、心を一つにして声の限りに叫んで応援した。

帰宅してテレビを観ると、二番目に通過した大学が往路優勝だった。あれだけ一位から離れていたのにと、狐につままれたようだった。山登りで順位が入れ替わったのだ。こうして、この年はスタートした。いつまでも感動が心に響き、その感動は一年間の原動力となった。

性格

小さい頃に消極的で、親や先生がこの子は社会を生きて行けないのではないかと心配する子供がある。しかし、成長するにつれて、驚くほど積極的な性格に変貌する場合がある。

次女は電車に乗ると「真ん中がいい」と言った。それで、いつも私と長女の間に乗ることになった。隣に知らない人が座るのをいやがった。ある日、私が真ん中で両側に姉妹が座ることになってしまった。次女が何か言ったが、居眠りを決め込んだ。次女は隣に知らない人が座っているので、緊張しているようだった。私は、フフフと笑った。降りる駅、小田急線の新松田駅に到着した。次女の方を見た私は仰天した。「えっ!」と叫びそうになった。次女の隣に座っていたのは、大きな体格の良い黒人だった。次女の隣に、足を折り曲げるようにして座っていた。私と目が合うとニコッと白い歯を見せて笑った。次女は言葉を飲み込んでいた。怖かったに違いない。その黒人の青年は新松田駅に着くと、私たちと一緒に降りた。立つと二メートルもある大男だった。紐のついた袋、アーミー・バッグを肩にかついで、私たちの後からついて来た。駅員と話をした。これから御殿場線で、御殿場に行くようだった。御殿場には自衛隊の基地がある。

次女は、小学生になると一人で電車に乗って買い物に行くようになった。友だちの中には、中学生になっても一人で東京に行った事がない子がほとんどだった。その後、イギリス、アメリカ、トルコ、ベトナム、スリランカ、チェコスロバキア、台湾など外国に行くようになった。トルコでは、トルコ大地震(1999年8月)を経験している。カッパドキアにいたので助かった。トルコは特に好きで、何度も行っている。トルコはチューリップの発祥の地、国の食料は自給自足し、海外に輸出もしている。

「トルコの朝食は^{にじゅうよえん}二十四円、ほら、こんなに豪華、美味しいよ、土地は、沢山あって安いよ。お母さん買う？どの男の人も鼻が高くで面長でハンサムだよ。お母さんが好きなイケメンだらけだよ。」たくさんの写真をみせてもらった。

お嬢さん

千葉大学の近くに千葉中央公園がある。次女の下宿に行った帰りに行ってみた。はるか上をモノレールが走り、裏手には大勢のホームレスがいた。池には古代ハスの群落があり、その周りでオカリナを演奏して楽しんでいる婦人たちがいた。ボート乗り場があり、ボートに乗ってみる事にした。どこにでも行ってみたい、高い所には登ってみたい、何でも食べてみたい、珍しい事が大好きな家族だ。

ボートの係りの人が、ボートをおさえたまま「お嬢さん、荷物は後ろに置いてください」と大声で言った。私は、「荷物は持っていません」と言うと、娘が「お母さんの事じゃないよ、私の事だよ」と言ったので驚いた。そして、私も、娘も、ボートの係りの男性も、次に待っている人たちも、ほがらかに笑った。その時の事を時々思い出してはニヤニヤしてしまう。そして、十年も経った今日、「お母さんは、あの時、『お嬢さん』と言われて、自分の事と思ったんだよね。おかしいね、まったく」と娘が言った。娘も覚えていた。私は笑いながら顔が引きつった。今日は、新宿のトルコセンターで開催されている「マーブリング教室」の展覧会に行った後、九州の名産を買ったり、北海道のソフトクリームを食べたりして、三十歳になった娘に遊んでもらった。都会の雑踏の中、幸せをかみしめた。

切り札

夫が嘆いた。「アメリカにいた時は、すぐメールの返事が来たけれど、日本に帰国し

たら返事が全然こない。メールを受け取ったかどうかくらい知らせて欲しい。送った相手は不安になるだろう。自分はいつもすぐに返信している。英語の本の一部を訳してほしいのだが、生物の本だから興味がないのかな。正確な訳でなくても、おおよその所でいいのだが」と。それで私が次女にメールをしてみた。「すぐに返事がくるよ」と夫に言うと、「何と書いたの?」と聞いたので、「言いたくない」と応えた。夜、あれほど無かった次女からのメールが来た。夫が不思議がった。何の事はない。私が書いたメールは次の内容です。「お父さんが、『英語をみてほしいとメールしても返事がない』と言っておられます。だから、母が『英語はできないんじゃないの』と言っておきました」というものでした。次女のプライドをちょっとくすぐっただけです。次女は高校生の時、イギリスのウエールズ大学や、アメリカのカリフォルニア州立大学のバークレー校で夏休み英語研修留学をしている。これは、ある大手の塾が宣伝用に企画したツアーだったので、感想文や写真の提供はあったが、滞在費は無料だった。塾には行かず、このツアーにだけ参加した。大学では国費留学生のサポーターをして、国からアルバイト代をいただいていた。大学院を卒業してイラン大使館で秘書をしてから結婚。約二年間、夫が研究員をしていたアメリカのメリーランド州立大学が用意してくれた住宅で暮らしていた。英語ができないわけではない。夫が「切り札は、何回も使えないね」と言った。私は、子育て中にこれに似た事を何度もしている。娘たちは、そのたびに怒って涙ぐみ、前に立ちはだかった課題に全力で取り組んだ。その結果、いつでも、どこでも生きて行ける自立した精神と、たくましい生活力が養われた。

成長

子供は、親の知らない間に成長をしているものです。

ある日、「あの人は、いい人だね。やさしくて、みんなに親切だし頭がいい。なぜ結婚しないのかしら。女の人は見る目が無いわね」と言うと、娘が言った。「いい人は、いい人で終わってしまうんだよ。いい人は、それ以上にいい人になれないし、それ以下の悪い人にもなれない。女の人は、ちゃんと見ているんだよ。」「なるほど。」

ある日、「あそこの奥さんは、作曲をしたりして教養が高い。上品。おだやかな物腰で、そつがない。それに比べて旦那さんは無愛想で、裏表が激しそうで、いやな印象を受けるわ。飼い犬を棒で殴ったりしている」と言うと、娘が言った。「いやな印象を受ける旦那さんと一つ屋根の下で生活をしているその奥さんは、実際には旦那さんと同じくらい嫌な感じの人なんだよ。お母さんは、あの奥さんと友だちだから、気が付いていないだけだよ。」「なるほど。」

ある日、「あの国会の議長は進行がうまいわ。なかなかいい。あの官房長官も報道陣をかわして、なかなかいい。あの幹事長も、おだやかで、まとめ役として、ぴったりだわ」と言うと、娘が言った。「お母さんが、とてもいいと言っている人は、その職に合っているのであって、その人が首相になっても、いいとはかぎらない。」「なるほど。」

ある日、「今度生まれて来る時には、犬には絶対になりたくないわ。鎖でつながれたり、尻尾を切られたり、避妊させられたり、まずいドッグフードを食べさせられたり、人間の言いなりで自由が無い。『待て』だの、『お手』だのをさせられたあげくに、『ここでは排泄してはいけません』なんて、犬を何だと思っているんだ。威張るな人間!」
と言うと、娘が言った。「お母さん、そんな考えは考えるだけ無駄だからね。」「そうでした。」

気が付けば、子供は親よりずっと先を歩んでいた。大人になっていた。

感謝

大きくなった娘たちが、親にしてもらった事のうち、一番良かったことにあげるのは、寝る時「お話」をしてもらった事です。

これは、最初は母親の私がしていました。定番の『桃太郎』『金太郎』『浦島太郎』『赤頭巾ちゃん』などは、すぐ覚えてしまい、逆に二人がお話を作り替え、混ぜて話してくれました。『シンデレラの家』に、『三匹の子豚』がいたりするのです。ペープサートを作って遊んだり、色眼鏡(左右に赤と青のセロファンを貼った紙のメガネ)を作ったり、あきずに繰り返していました。母親の私の話は、すぐに底をつき、代わって父親が「お話」をすることになりました。『シートン動物記』や『ファール昆虫記』などが人気でした。「お父さんのお話を聞いているだけなのに、吹雪の中に狼が出てくる。すごいよ」と娘たちは興奮していた。

次にあげるのは、「博物館、音楽会、美術館、映画館に連れて行ってもらったのもよかった」と言う。三十年前、普通の家庭では温泉旅行や遊園地や動物園に子供を連れて行っても、博物館、美術館、コンサートなどに行くような事はほとんどなかった。

保育園の時いっしょだったお母さんが言った。「夏に保育園を休んで人形劇に行ったら、池田さんの親子が一番前で堂々と見ていたから驚いた。私たちは保育園を休んで行ったからドキドキだったのに」というような話は、いくらでも残っている。私は、自分が観たかったので、娘たちを連れて行ったのです。そして、大きくなった娘たちは、自分で積極的にでかけ、「土産話^{みやげばなし}」をしてくれるようになった。

二人の娘が就職して落ち着くと、なんと一年に一度、今度は私たち親に「食事の招

待」をしてくれるようになった。感謝の気持ちを込めて、毎年、私たちの誕生日の四月に計画してくれます。食後、みんなで小さなプレゼントを交換します。幸せな時です。そして、「お母さんと、お父さんが、仲がいいのが嬉しい」という言葉をもらいます。東京に行くのに、新松田駅から新宿駅まで小田急線のロマンスカーに夫と一緒に乗るのも楽しみです。「ロマンスカー」とは、いったい誰が名付けたのでしょうか。本当にロマンを乗せて走ります。私はロマンスカーが大好きです。

大きな幸せ

家の東側にボーリング場があった。毎日のように娘たちを連れて遊びに行った。ボーリングがピークの頃で、自分と同じぐらいの年齢の若者が大勢楽しんでいた。会場は広く、中に入って見るだけなら一日中いても無料です。交通事故の心配もありません。ボーリングをしている若者の会話が聞こえて来た。「あんなになりたくないわね」「そうね、いやね」それは私たち親子を見ての会話でした。

今、自分の子育ての頃をふり返ると、平凡だけど幸せだったと思うのです。娘たちが育った田舎町は、のんびりした時間がいつまでも流れていました。その中で、のびのびと育って行きました。菜の花やレンゲ畑の向うで「お母さん」「お母さん」と私を呼ぶ笑顔の二人の声が耳に残っています。赤いスカートの姉妹です。明るい春の日差しがいっぱいでした。私を「お母さん」と呼んでくれた事に「ありがとう」と言いたい。感謝の言葉を何度も言いたい。

小さな小さな幸せは

小さな小さな喜び

みつかるよ 小さな喜び

小さな幸せは 本当は大きな幸せ

これは、2011年2月11日、NHK総合テレビ(19時30分~20時45分)『NHKスペシャル』「無縁社会 新たな“つながり”を求めて」の放送の中で、紹介された『小さな幸せ』という歌の一節です。「NP 白浜レスキューネット」は、多くの自殺者を救っている。この歌の楽譜の事で、活動の中心になっている牧師さんと直接話ことができました。貴重な体験でした。

願い

実の兄弟姉妹が隣同士で住んでいて、うまくいっているという話を聞いた事はありません。兄弟姉妹を仲良く育てるのは親の最大の役目です。それは、老後の楽しみを二倍にしてくれ、幸せを分かち合えるキーワードです。だから、とても大切なのです。

著書『満点ママ』(夢工房)に書いたように、私が子育てで一番気を使った所です。私の娘二人が、そして娘の家族が、いつまでも仲よくと願っています。

六月は、娘たちの誕生日があります。山形の煎餅の詰め合わせと、「みんなに愛される人になって下さい」というメッセージをメールで送りました。

去年は、実業之日本社から『もっと好きになる日本の童謡』と、春陽堂から『童謡・唱歌風だより』の二冊の童謡の本の執筆に明け暮れていたため、娘たちの誕生日を忘れてしまいました。今年(平成十七年)は、早くから誕生日に合わせて煎餅の注文をしておきました。

誕生日の前日になって、私の父が昔私に言った言葉を思い出しました。「みんなに愛される人になるように」と。聞いた時は二十歳ぐらいだったので、「ふーん」と聞き流したのですが、この言葉は、次第に心に広がり重みを増して行きました。

東京に住んでいる次女からメールで返事が来ました。「そうですね。それはとても重要な事ですね。でも、自分の努力だけでどうにかできるものではないように思います。子供の時の育て方にもよるのではないですか。自分は、それは良かったと思っています。」

長女は夕食に来てくれて、勤め先の事や、今がんばっている趣味の事など楽しく話して帰りました。夫が、「誕生日おめでとうとメールを打っておいたよ」と得意そうに言いました。「今年は、二人とも娘の誕生日を忘れなくてよかったね。」二人で胸をなで下ろしました。どの親も、いつも子供の事を案じ、まっすぐに成長してほしいと願っているものです。

こんぺいとうのうた

「私は時々、世界で一番小さい星を食べる。それはコンペイトウという名で、どの星座にも属していない」(寺山修司)。

『こんぺいとうのうた』を作りました。中京大学教養部の中田友一先生の詩を私が補作しました。曲は下村俊樹さんが作曲したものを私が編曲しました。いつでも、だれでも、ピアノを弾きながら歌えるように編曲してあります。みなさん歌ってください。

歌い方についてのワンポイントアドバイス

- ・「とがったつなの」のシンコペーションが意表をついています。
- ・「ちっちゃなおかし」は、本当に小さくなって歌ってください。
- ・「どーして どーして」は、不思議そうな顔で歌ってください。
- ・「かわいいな」は、思い切り明るくしてください。

最後のピアノ部分は、こんぺいとうが転がって行くようです。

こんぺいとうのうた

作詞 中田友一

作曲 下村俊樹

補作・編曲 池田小百合

一、とがった つのの ちっちゃな おかし

どうして どうして うまれたの

ひとつぶ ひとつぶ かわいいな

二、とがった つのの ふしぎな おかし

ともだち みんなの かおがある

ひとつぶ ひとつぶ たのしいな

♩ = 90 こんぺいとうのうた 中田友一 作詞 下村俊樹 作曲
池田小百合 補作・編曲

The musical score is written for piano in 4/4 time with a tempo of 90. It consists of three systems of music. The first system has two staves (treble and bass) and includes two vocal lines: '1. とがった つのの ちっちゃな おかし' and '2. とがった つのの ふしぎな おかし'. The second system also has two staves and includes two vocal lines: 'どーしてどーして うまれたの' and 'ともだち みんなの かおがある' on the first line, and 'ひとつぶひとつぶ かわいいな' and 'ひとつぶひとつぶ たのしいな' on the second line. The third system is labeled 'Coda' and has two staves. The piano accompaniment features a rhythmic pattern of eighth notes in the right hand and chords in the left hand.